

教 仏 名 聞

第44号

(発行日)

2014年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

弥陀の名号称えつつ②

弥陀の名号となえつつ

信心まことにうるひとは

憶念の心つねにして

仏恩報ずるおもいあり

現代語意識(念仏を称えつつ、この念仏を選びとられた仏の本願のまことを疑いなく信ずる人は、つねに心に本願を忘れずに、仏恩を感謝する思いが持続する)

前号に引き続き、親鸞聖人の製作されました「弥陀の名号となえつつ」のご和讃のお話を致します。

弥陀の名号を称えると言うことは、弥陀の名号である南無阿弥陀仏を称えることです。(南無阿弥陀仏)を声に出して称えることです。これを称名念仏と申します。この称名念仏を日頃、日々の生活の中で、気がついたら称えるのです。よく忘れますが、忘れてもまたふと思いついたら、また称えるのです。このように反復しつつ生活をす

る、それがお念仏の生活であります。

そして、仏法聴聞とは「称えていられるお念仏が私にとって何であり、何を意味するか」を何度も聞くことです。

お念仏の意味(「いわれ」)を聞くのは、お寺でのお説教を聞くのが一般です。真宗のお念仏に関する本を読むのも結構です。また身近な人でお念仏を喜んでいられる方のお話を聞くのも結構です。聞いて自分の身にひきあてて思うて見ることです。

真宗門徒でありながらお念仏も申さず、お念仏の有難いお心を聞くことが無いのは、宝の山にいなながら宝を取らずに下山するようなもので、勿体ないことです。真宗門徒の家に生まれたり、嫁いだりしたことは、宝の山にいますよなものですね。もしこれが真言宗の檀家さんですと、宝は高野山の道場にありまますから、高野山に登って専門道場で修行せねばなりません。またも

し禅宗の檀家ですと、宝は禅の道場にありまますから、そこで苦しい坐禅修行をしなければなかなか宝は手に入りません。

しかるに真宗門徒の家にいるということ、阿弥陀仏様がお内仏(お仏壇)にましまして、ともに生活することです。お内仏の阿弥陀様もご先祖様も「汝念佛申せ、念仏を聞いて助かれよ」とお勧め下さっているのです。そのお念仏は、日常生活のまっただ中で称えることができ、聞くことができ、そのことは、そのままだれでもどこでも阿弥陀仏のお助けの中にあることになっていられるのです。ですから宝はすでに家の中にあります。いやそれどころか、お念仏の声の上にあるのです。ただし、真宗の門徒でありながら、念仏も申さず、念仏のいわれを聞かなければ、宝の山の中にもありません。そうとも知らずに生涯を終えてしましますから、宝の山に入つて手を虚しくして帰るようなものなのです。

このようにして、お念仏が

口に称えられるようになりますと、あとは、この一声の「ナムアミダブツ」のお心を聞くだけです。そこにすでにお助けは来ているのです。何回称えなければならぬという条件もないのです。お助けにいうのは「阿弥陀仏がいつも私とともにいて下さる」と感知されることです。

時々「称えられませぬ」という人がいます。それは「称えられないのではなく、称えようとしない」のです。自分の意見や考えを立てて抵抗するので、お釈迦様や善知識方が「念仏申せ」「念仏を聞け」と懇切に仰っています。それが、それに対して自分の考えを張り立てているのです。

「まだ私はやっていけない」「私は賢い」「私は自分で自分の人生を切り開ける」「自分の力で幸せをつかめる」という自負心が強いですから、「我が名を称えよ」との阿弥陀仏の仰せ、それをお伝え下さる善知識のお勧めをはねつけているのです。

もちろんその人が何らかの道や他の方法で真実を求めた、すでに真実にであっているなら、称えなくてもいいで

しよう。しかし、大抵は、真実への道はついていないのではないでしようか。ただ日々に方向もなくあてもなく流れていつているだけではないでしようか。『法華経』という經典にはこうした私たちの姿を「火の付いた家にながら、そうとも知らず家の中でおもちゃに夢中になって遊んでいる子供のようなものだ」とオサトシになっています。火の付いた家の中で、もうすぐ家は焼け落ち（死ぬ）ようとしているのに、それに気がつかず、目の前のおもちゃやゲーム（この世の楽しみ）に夢中になって、家から出ようとしていない愚かな子供、そんな姿の私たちのだと、釈尊は教えて下さっています。

私が私の本当の状態を知ることにはなかなかできないですね。自分の顔が汚れていても自分では分からないように、（自分は何ものであり、どこから来て、この世で何をしており、そしてどこへ行くつもりなのか）を私たちは知らないのです。それを愚痴の凡夫といいます。そういう私の姿を教える下さり、同時に救いを知らせて下さるのが釈

尊が説かれたお経の言葉です。善導大師の『観経疏』に「経教はこれを喩ふるに鏡のごとし。しばしば読みしばしば尋ねれば、智慧を開発すと仰せられています。鏡を見ると自分の姿が分かるように、經典（浄土の經典）の言葉は鏡のように私の姿を映して下さり、真実を教えて下さいます。それをよく学ぶ（聞慧が開けてくる、と仰せられています）。

仏様から教えられると、私たちは真実を知らず迷っていて、真実でないものを真実としている、いわばウソを本当作りにしている凡夫であること、それゆえに苦しみから解放されない愚かな身であることを知ります。

そしてまた、私たちは煩惱具足の身であると知らされません。欲と怒りが心にべったりとへばりついていて、しかもそれを取り除くことのできない身であることを知らされません。

欲と怒り、いわば「あんなりたい」「こうなりたい」「あんなりたい」「こうしたい」、あんなりたいくない」「こうなりたくない」「あれをしたい」「

「これはいやだ」という自分の欲求を元に生活をし、自分の思い通りにならないと「腹を立てる」「怒る」「憎む」「うらむ」「ねたむ」という不足不満で一杯になる、そういう煩惱具足の身であります。しかもこの煩惱をどうすることもできないあわれな存在であります。

しかもまた無常の身で、老いに責められ、病気を怖れ、死におびえ、死後に不安を持つている、そういう無常の憂苦をかかえている身であります。

こういう、真実を知らない愚かさやむさぼりや怒りなどの煩惱、そして無常の身で死につつある苦悩の私。そんな自分でありながら、それを何とも思わず「これでいい」「これでやっていける」と思い、幸せはいつかどこかにあるかのごとく夢を見ている、そのような凡夫なのです。

こういう私たちの真相を知り抜いて、（真実そのもの）が法蔵菩薩となって出現し、私たちにまことの安らぎを与えたいと願い、智慧と慈悲とのち量りなき仏にしたい、助けたいと願って、願を発し、

修行して、私たちをまるごと助けることのできる仏となりたもうた、それが阿弥陀仏です。

そして、阿弥陀仏の救済力である本願力が南無阿弥陀仏の言葉となって私たちに、私どもの称名念仏となって現れて下さっているのです。阿弥陀仏の救いの力である本願力が、一切の生きとし生けるものに喚びかけて、救いを告げ知らせて下さる言葉、それが南無阿弥陀仏であります。

その南無阿弥陀仏を称えるのが称名念仏です。「ナムアマダブツ」と称える。これが続いていくことを「弥陀の称号称えつつ」というのであります。これはだれにもできる行（おこない）です。「私は称えない」と言い得ても「私は称えられません」とは言えません。

こうして「称えつつ」その称えられている南無阿弥陀仏のお心、すなわち（汝を助ける）という阿弥陀様の大悲を聞く。南無阿弥陀仏のいわれは、つづめると「助ける」の仰せ、「引き受ける」の仰せです。このお心を詳しく釈尊がお説きになったのが『仏説

無量寿経』です。これを詳しく聞こうとすると、広大な思し召しになります、つづめると「汝のそのままなりで助ける、浄土へ至らしめる」の大慈大悲のお心であります。

「助ける」とはどういうことか。誰が、だれを、どのよう助けるのか。助けるとはどんな状態からどんな状態になるのか。なぜ助けてもらわねばならないのか。などなど内容は、どこまでも広がります。広がりますが、それを全部わからないと助からないというのではありません。南無阿弥陀仏の念仏のお声を、「汝を引き受ける」との阿弥陀仏の仰せと聞き、ハイとそのまま聞き受けるばかりで助かるように仕上がっているのが南無阿弥陀仏の仏法です。ですから、どんな愚かな者も、また臨終さし迫っている人でも助かることのできる法なので

す。

この四月半ばにチェジュ島行きの韓国船セウォール号が沈没し多数の死者を出しました。多くの高校生が犠牲になり、絶望的な中で家族が岸壁で泣き崩れている映像は痛ましかったですね。

精神的に言えば、私たちも、真つ暗な海に投げ出されて、あてどもなく漂っているような存在であり、今にも暗い海の底に沈んでいくような存在である、仏様の眼に見られているのです。そのような私たちを乗せて安全な岸（彼岸の世界。お浄土）へ運ぼうとして、私たちのところにまで、助け船のようにして来て下さって、喚びかけておられるのが、今口に称えられ、耳に聞かされる南無阿彌陀仏の声なのです。南無阿彌陀仏の「南無」とは「乗れよ」であり、「阿彌陀仏」は「助けるぞ」との仰せであります。

沈みかけているセウオール号に救助艇が近づいて、救いを待っている人たちに「助けに来たから、早く乗れよ」と喚びかけている、そういう状況がテレビで何度も放映されています。舟から「乗れよ、助ける」と喚びかけるとき、沈没しかかっている者は、もはや理屈もわけも尋ねることもない。ただそのまま乗るばかりでありましょう。へこの助け舟が本当に頑丈で大丈夫かどうか、へ本当に安全な岸まで行ってくれるのかどうか、へ舟を操縦が

上手か下手か、そんなことを詮索する余地はないですね。舟から「乗れよ」の喚びかけのまま、理屈離れて乗るばかりであります。それと同じで、いよいよお先真つ暗で、死んでこのまま真つ暗な中にすべりこんでいくばかりとなると、ああじゃこうじゃはなく、南無阿彌陀仏の仰せに「ハイ」としたがうのみ。ハイとしたがえ、不思議なことにすでに本願の船に寄せられているのです。あとは船に寄せられて向こう岸（浄土）に向かって進みゆくのみで、安心であります。南無阿彌陀仏は一回聞いて、ハイとしたがうばかりで助かる法であり、その法をいつでも今聞くのです。中には「どうしたらハイとしたがえますか」などと尋ねる人がいます。「助からぬ汝を助ける」の有難い仰せを聞けば、おのずと「ありがたい」「ハイ」と受けずにはおれないのです。へハイと受けねばならぬいというようなことではないし、へどうしたらハイとしたがえますか、などと工夫する必要もないのです。広大な阿彌陀様のお慈悲を聞く、したがわざるを得ないので、

もいあり」で、阿彌陀仏のご恩を有難く思い、お念仏申さずにはおられなくなるのであり、「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」とお念仏申しているままがおのずと仏恩を報謝していることになっているのであります。（了）

《住職雑感》

「国にいのちをささげた英霊にお参りしてなぜ悪いのか」と靖国神社に参拝する国会議員たちは言う。今度の戦争では日本国（あるいは天皇）に命をささげることが、他国に侵入し、それによって他国の多くの民衆が戦争に巻き込まれ、多くの人が犠牲になったのが歴史の実際であった。殺された側の人々（その子孫）の嘆きや怒りが靖国神社への参拝に批判的になるのは自然である。その批判や心情には、「国のためにいのちをささげた」という今度の日本の戦争行為が「正当なものである」と大東亜戦争を肯定する考えが靖国神社への参拝を支持する側の底流に潜んでいると感じて、それに抗議しているのもあろう。

「国にいのちをささげた英霊が靖国神社にいる」と思っているのは、その人の持っている（靖国信仰）（靖国思想）である。戦場で亡くなった父や子はお仏壇、あるいは故郷の墓にいます。浄土へ生まれたと信じる人たちもい

る。天国に召されたという人もいる。あるいは亡き人は次の世に生まれ変わっているという人もいる。死んだらもう何もないという人もいる。「天皇と国家のために戦死した人は靖国神社に祀られる」という、戦前に時の政府によって教え込まれた、いわばすりこまれた特殊な「靖国思想」を、あたかも日本国民なら誰でも持つのが当たり前の如くに思い込んでいる国会議員が多い。そしてこうした議員のお参りの動機は、素朴に「いのちをささげた人への哀悼が大事」と考える多くの国民の一票が欲しくて参拝に行くのではなからうか。戦前、なぜ政府は「天皇と国家のために戦死した者は靖国神社に祀られる」と教育したかという、明治維新以後から、政府が戦争を遂行していく中で、夫や子供を亡くす遺族が次々と生まれてきた。そうすると遺族の間に、どうしても政府や天皇に対する怒りや不満が溜まっていくので、それを慰撫するためであった。また兵士に、戦場で死を恐れず戦闘を遂行させるために、靖国思想が鼓舞されたのである。

もし仮に国が、戦前戦後にかかわらず政府の出動命令に従って亡くなった人々をいたみ、純粋に追悼し、平和を念じる場をどうしても設けたいなら、どんな思想信仰の人であろうとも心から追悼でき、しかも他国の人たちの怒りを受けない、そういう場所なくてはならないだろう。

木村無相さんの法信 20

五十八年九月八日(木) 無相

九月四日づけの今日、八日に入手したミニレター、大変ありがたく、うれしく、今、二回読ませてもらいました。

ありがとう ありがとう

如来聖人のオカゲにて、紀さんもやっと、「信心」について書いてくるようになり、ホントーに嬉しく、ありがたく思います。

七月二日かの

無相さんのイノチであるへただ念佛してを真直線にあゆみます。たとい、多くの人がそれを真宗でないといつても

という手紙、あの今までにない決定心の手紙を読んでやがては、そのうちに「信心」について書いてくると思いましたが、それが早く来て、「ああ、来年、書けなくなる前に、言っ来てよかった。」書けなくなつてから、代筆では、とても、くわしく、返事書けないので。

ありがとう ありがとう

「ご廻向のご信心」について、書いて来て

「目」とも書きにくいので、判読して下さいよ。セイイッパイ書きますが、とても見えにくく書きづらいのです。

さて、九月四日づけの今日いただいた手紙の全文について感ずるまま、信ずるままを書かせてもらいます。

まづ、「南無阿弥陀仏」と書いてくれてありがとう。「ナムアミダブツ」とは、

如来さま、ジキ

ジキの私えの「呼びかけ」のお言葉ですから、「南無阿弥陀仏」と書いてくれていと実ありがたい。『念佛詩抄』44ページ、

「見せて下さる」

ナンマンダブツ

ナンマンダブツ

へ口から現われる

ナンマンダブツさまは

汝の助かる法は

これであるぞ

と

見せてくださるのじゃ

とあるが、

ナンマンダブツは

（汝の助かる法は

これであるぞ）

というお言葉であり、

ナンマンダブツ

これ一つぞよ

というお言葉で、それを、手紙の一番はじめに、紀さんが書くようになってくれ、ホントーにうれしくありがたいことです。

紀さんは、自分でピツタリしないことをよい加減に書く人間でなく、その時、その時のアリノママを語り書くので、とても安心して「これが紀さんの今の気持ちだなア」と、よくわかって、ありがたい。

アイマイなことは、正直に、アイマイに書くので、よくわかるので。

○

さて、「幾度もお便り有難うございませ」とあるが、忙しい間にはさんで、書くのでまとまったことは書けず、相すまんことです。

○

さて、「こちらはまだまだ日中は暑いー」とのこと、北陸のこちらも、その通りで、今も暑い。クーラーがほしいが、今日はまだ入れてくれない。

「お身体の方がいかがですか」

カラダの方は、全快はしないが、悪いといつてもこれ以上よくならんようで、よくならん方としては最高にいいのです。

心臓の方は、この春、病んだ「たんのう

炎」の方は五月末退院後、月一回ぐらいつつ、X線写真をとってくれますが（八、九枚）、まだ、タンノウに「砂」がある

とのことで、いつ大爆発して、腹部に大

劇痛がおこるかかわからないので、入院用のモノをチャンと用意して、ヘヤの外

ペランダにおいてあります。スグに入院

出来るように。いつも急に入院するので、

入院時に持ってゆくもの、ツクルのに大

変なので。しかし、心臓、タンノウエン

○

さて、「ご信心」のこと。

(一)如来廻向の信ということ、凡夫の方からの信心を否定し、又、信ずる力の無き者と知らせ給う。

その通りですねエ。

普通に「信心」というと、このタノミにならぬ「凡心」「凡夫のココロ」を、はたらかせて、如来とか、本願とか、念仏とか、を「信じる」ことのように思っ

ているが、それは「信心」でもなんでもなく、それは「凡夫の思い」にしかすぎないですねエ。そこを香樹院師は

往生不定というのも 凡夫の思い

往生決定というのも 凡夫の思い

その二つを捨てて、

ミダをタノムのじゃ。

とおさとし下さっている。

御縁にあつて、自分のココロで、自分のことを「往生不定」と思つてさびしがる、又は「往生決定」と思つて、よろこぶ、その二つとも、「凡夫の思い」であつて、「御廻向の信心」ではないから、香樹院師が

その二つを捨てて

「往生不定」と思つ、思い

「往生一定」と思つ、思い

にこだわるココロをすてて、そんなものは、真実信心でもなんでもない。凡夫の

一時的な思いにしかすぎないから、そんな

凡夫の思いにとらわれて、信心いだいたの、ただけのと、さわぐ。そのトラワレを見限り捨てて、信心とは、そうした「凡夫の思い」をタノム、タノミ

にするのではなくて、「ミダ」をタノ

ム、「如来を」タノム、「本願」をタノ

ム、「弥陀大悲の誓願」をタノミにする

ことが、「信心」であるぞよ、と、教え

て下さっているのですが、イワユル「凡

夫の思い」を信ずる、ニセ信心を、信心

のように思つて、「いただいたの」「い

ただかれんの」などと、さわいでいるが、

それは、ムダゴトで、凡夫の「ココロ」

は、かわり通しで、「虚仮不実」である

から、そんな不安定なものをタノミにす

ることを止めて、弥陀の真実を、弥陀大

悲を、ミダを、如来を、タノミにせよ、

とのオサトシなのですねエ。(続く)

